

第5章 社会環境

第2節 他地域（久賀島）との関わり

奈留島内の集落は、奈留港から相浦湾の南側に位置する古巣集落にかけての比較的平坦な谷間に位置する中心部を例外として、その多くが海岸から山頂に向けた溪谷に位置している。それぞれの集落を区切る山の勾配はきつく、そして、基本的に海にまで突き出ている。このような奈留島の集落景観の特性は、隣接する久賀島や若松島をはじめとした五島列島の多くの集落構造とも共通することであるが¹、奈留島においては、集落景観が島を囲んでいる五島灘や東シナ海域に広がる各集落や魚場、そして、それらを結ぶそれぞれの集落が有する海洋交易網を基礎に成り立っている。社会風俗的な観点から奈留島の集落景観の特性は、各集落における年中行事や祭礼における「ご馳走」や「お供物」をはじめとした、島民の「食」にまつわる語り（言説）の分析から導き出すことができる。

本章では、奈留島内にある現存集落と消滅した集落で行った現地調査（平成29～31年）、各集落の現・元住民や隣接する島々の島民、および、船舶所有者や漁業関係者をはじめとした海上業務従事者への聞き取り調査を基本としている。奈留島の集落における社会的な特性が示すものは、海を越える住民の移動と交流であり、これは、五島列島に広がる奈留島以外の島嶼地域に共通することでもある。隣接する西南の久賀島の住民を含め、奈留島の集落の住民への聞き取りをおこなう際に注目すべきことは、潮流や海流の変化に関する卓越した知識であり、集落の住民は昔から海の変化基礎にして日常的な社会経済的活動を営んできた。そのため、集落という陸上において可視化される景観は、海上につながる住民の生活につながって形成されている。

1. 奈留島の集落景観の特性

海洋交易においては、海流や潮流、そして、天候の影響を受ける海の状況は、住民の海上における活動だけでなく、彼らが居住する集落を何処に、そして、どのように作っていくか、という重要な判断材料になっている。何処に舟付けをし、そして、浜には近いものの時化や高波の影響が受けづらいような機能的な場所が好まれる。

奈留島で現存もしくは消滅した集落に共通するのは、いずれも舟付けしやすい海岸を有していることである。まず、島内の多くの集落が礫浜を有していることである。奈留島の礫浜は高低差が大きく、水深が深いところから傾斜をもって陸地につながっている。そのため伝馬船のような小型木造船で接岸し、そして、海水面から離れた浜に船を係留することが可能である。

東風泊地区や矢神地区などの外海および瀬戸に面している集落の場合、時化や海上の天候に影響を受けやすいのに対し、島の北側の相浦湾、船廻湾、そして、大串湾などに位置する集落は、その自然的形状から海上の天候の影響が軽減されている。そのため、集落住民は海の状況

¹ 『五島市久賀島の文化的景観保存調査報告書』（2011）を参照。

に応じて漁に出たり、近隣の集落に移動することが可能であった。その際も、住民は小型船を活用し、沖合に停泊した漁船への移動手段として利用したり、または、別の島にある集落に小型船で直接移動したりもした²。

また、水深がある奈留湾は、古くから規模の大きい漁船やフェリーを接岸できた形状をしていたことから、島内の経済・社会的な中心港として機能してきた。奈留湾は東西と北の3方が陸地や隣接する島々（前島や杣島など）に囲まれていることで海流から遮蔽されている良港であるだけでなく、港の入口となる南方に見える景観は、福江港とその背後にある鬼岳に正対したものであり、同時にその右手（西側）には久賀島東岸の五輪集落をそびえるという、下五島地域の過去から現在に至る主要海洋交通網の代表的な景観である。このように、奈留島の集落は、海上での活動における地理的利点に恵まれながら、より広域の海洋交易網につながっている。

そのため、奈留島内の各集落の景観は、上記のような海へのアクセスの利便性と機能性を基礎に形成されている。多くの集落において活用可能な陸上空間のスペースは限定されており必ずしも広いわけではない。このことは、「天草市崎津・今富の文化的景観」をはじめとした、日本国内の他の漁村景観とも共通することではある。そのため、この限定された陸上景観は「辺鄙」や「辺境」とするというよりはむしろ、海洋交易・交通の視点から機能的なのである。

例えば、奈留島の西南に位置する久賀島においては島の中心部に水田と棚田が広がっている。久賀島の水田・棚田景観は、島内の湧水の供給量が豊富であることを立証している。このことをから、久賀島で農業に従事する住民も、奈留島において水田・棚田用の耕作地が限定されていることは、奈留島内の真水の供給源が乏しいことが原因であると語ることがある³。確かに奈留島においては、船廻地区以外はまとまった空間的な規模を有する水田は見られない。隣接する久賀島における河川や湧水による真水の供給量が多いことや島としての空間的規模が大きい福江島において農地面積が広いことと比較すると、奈留島の集落における真水の量は限定されているような印象を受ける。しかし、それはあくまでも水田の景観的な面積の比較を基礎とした印象である。実際のところ、奈留島内に現存する集落と消滅した集落の両方とも、住民生活や農耕の支えとなる小川や井戸を有している。

大串地区においては大串湾に西と北東からそれぞれに流れる小川、江上地区においては集落東部にある遠命寺トンネル付近を水脈とする小川、そして、小田地区や宿輪地区も溪谷から海に流れる小川を有している。また、水田がある島の中部の船廻地区はもちろんのこと、北部の矢神地区や南東部の東風泊地区でも同様に小川を基礎に集落が形成されているになっている。

山から流れる小川を基礎とした集落景観と異なるのが、池（もしくはラグーン）を中心とした集落である。東部の汐池地区は、中央のラグーンを囲むような集落形成になっている。このラグーンは山から流れ込む小川の水と池の中にある井戸が真水の供給源になっており、これが集落住民にとっての水源である。ラグーンの西側である山のふもと側では、このラグーンを水

² 筆者による聞き取り（久賀、奈留、福江、若松：2018年2月および8月）。

³ 2018年2月：久賀島での聞き取り調査。

源とし水田による農業が営まれていた⁴。また、このラグーンは、以前は潮位の変化に伴い海水が流入したことから豊かな漁場にもなっており、かつてはウナギやボラを捕ることができたという⁵。

汐池地区と同様のことは、現在は住民がいない消滅集落である東北部の袋部地区にも見られる。礫浜と山の斜面に挟まれた袋部の旧集落には湧水を基礎とした池があり、現在は自然の中に生活する動物にとっての理想的な居住環境となっている。この池の水にまつわる社会生活に関する語りは奈留島東部の椿原地区でも聞き取れ、ここでは、土地整備がおこなわれる以前は集落の中心部（現在の公共トイレ付近）に集落の井戸水と河川の水が流れ込んだ池があり、集落の水の供給元となっていた⁶。

この、「海」、「小川」、そして、「井戸」という「水」を基礎とした集落形成、および、農地の開墾は、奈留島の全ての集落に共通する景観的要因である。この景観特性は久賀島を含め五島列島に共通することではあるが、奈留島は、規模は違えど久賀島のように小川を基礎とした集落景観と、奈留島特有の池（およびラグーン）を基礎とした集落景観という水にまつわる2種類の景観を有している。住民は、集落にある小川や井戸、そして、池から得られる水を活用して、斜面に切り開いた段々畑や水田での自給を基礎とした農業に従事していた。

この奈留島における「水」にまつわる社会的な特性は、陸上における集落景観に加え、各集落の海洋交易網の要素でもあった。例えば、天草付近から五島列島にかけての海上で生計を立てていた家船などが交易において奈留島に寄港する際、宿輪地区の住民などは彼らに集落の井戸水を飲料水として提供したり、浴槽を準備し来訪者に入浴する機会を提供していた⁷。換言すると、奈留の住民は、集落の「井戸」という陸上において入手できた「水」は、集落住民の生活や農作物の栽培のための資源としてだけでなく、海という「水」を基礎とした海洋交易の直接的な構成要素となっていた。

奈留島の集落景観は、上記のような住民が有する海洋交易における利便性や海洋資源へのアクセス、そして、限られた陸上空間を活用するための知識と、小川や井戸水といった水源や山から採取できる野草等の天然資源を活用する知識のうえに形成されている。田畑に作付けされたものとしては、奈留島内の住民生活の多方面で用いられた甘藷をはじめとして、小麦やトウモロコシ、山から採取したヨモギや野イチゴ、そして、沿岸と近海の漁場から得られたイワシやキビナゴ、鯛、ボラ、イカ、そして、マグロやカツオ、ブリといったような豊富な海産物が、集落住民による農業・漁業活動により収集された。そして、海を介した交易において、奈留海域で水揚げされた海産物は加工され島外へ取引されていった。それに対して、米や大豆、そして、小豆などをはじめとした奈留島内では産出量が限定されていた作物が島外から持ち込まれた。各家庭の食卓や冠婚葬祭といった集落の儀礼における供え物やご馳走には、上記の奈留

⁴ 筆者による聞き取り（汐池：2018年8月29日）。

⁵ 同上

⁶ 筆者による聞き取り（椿原：2018年8月29日）。

⁷ 筆者による聞き取り（宿輪：2018年2月19日）。

島内外から入手した農作物と海産物が用いられている。そのため、食は、その食材の背景にある集落を囲む陸地と海上の両方の景観とつながりながら、奈留島の住民の社会生活を表象しているのである。

2. 食と結びついた集落景観

日常の食事を含め、儀礼における供え物や集落行事におけるご馳走といった食文化は、住民が置かれた自然環境的要因を受けながらも、漁猟や農耕に関わる技術、地域間交易、そして、調理に関わる手法といった、様々な文化的要因を含有している。畑でとれる作物は、単純に日常生活における栄養の供給源としてあるだけでなく、その作物や作物の部位が有する特性や加工方法により、市場における価値づけに影響を与えると同時に、作物自体の集落内での消費の際の価値づけを左右した。この収穫物の加工方法や価値づけによる差異化は、奈留島で水揚げされる海産物にも共通しており、市場に出荷されるものやご馳走としてふるまわれるもの、そして、集落で消費されるものと住民は区別していた。

しかし、そのような恵まれた自然環境においても、完璧な自給自足的な体制を奈留島内の集落が有していたわけではなかった。そのため、各集落の住民は必要な食料や物資、または、人材などを近隣の集落と必要に応じて取引・共有することにより集落間の結びつきを形成してきた。例えば、久賀島と奈留島の集落の間では通婚関係がみられるだけでなく、相互扶助や経済活動、そして、宗教活動といった幅広い分野で、海を越えた集落間の交流が活発であった。

(1) 農業から見る集落景観

五島列島において甘藷の栽培は、商用と消費用の両方において古くから取り組まれていた。昭和9年（1934年）に発行された『五島民俗圖誌』では、五島全域の甘藷の出荷量は約2千万貫（75000トン）と記されており（p. 48）、五島内における消費のみならず、長崎や佐世保に出荷されていた。奈留島内においても、甘藷は集落を囲む山の斜面に切り開かれた段々畑において栽培されていた。収穫された甘藷は、切り干しであるカンコロとして加工され仲介業者を介して島外に出荷されたり、島内での消費用に保存されたりした⁸。

甘藷は、主食としてはもちろんのこと、加工してデンプンを作ったり、発酵させて焼酎（ドブク）をつくったりと、幅広い活用がされていた。奈留島内の酒屋では、焼酎をカウンターのような様式で提供していたところもあり、その意味で、甘藷は子供から大人まで、幅広い世代になじみのあるものである。また、切り干しであるカンコロの中でも質のいいものは市場に出荷されただけでなく、集落内では贅沢品とされたり、米と混ぜた「カンコロメシ」（イモ飯）という炊き込み食として消費される⁹。そして祭礼時の食事の際には、ツキアゲとよばれるイモの揚げ物にもなった。

⁸ 筆者による聞き取り（椿原：2018年8月29日、樫木山：2018年8月24日、汐池：2018年8月22日など）。

⁹ 筆者による聞き取り（矢神：2018年8月28日など）。

甘藷ほどの量ではないものの、奈留島の集落では麦も作物として栽培された。甘藷にまつわる島内住民の語りが、商用・消費用という多方面にわたっていたのに対して、麦に関する記憶は、主に島内における消費に関わるものが主である。具体的には、以前は、小麦から保存食である麦味噌を毎年作ったりしたとともに、現在でも準備した小麦粉をイーストを混ぜて発酵させたふくれ餅（中華まんのおまん、もしくは、中国の豆沙包子に類似）をこしらえお菓子や年中行事の際に振舞ったりする¹⁰。

カンコロメシやふくれ餅という奈留島が表象する五島列島の特産物にみられるのは、島内の各集落の農地・農業景観が、各集落の食卓や年中行事といった社会活動を媒介として、海を挟んだ島外の集落や社会と結びついていることである。これは、カンコロメシの原料である米の生産が水量の関係から奈留島内の多くの集落で限定され、島外供給への依存率が高かったことや¹¹、麦味噌の原料となる大豆もふくれ餅の餡となる小豆も奈留島内での生産量は限定されていた（また、現在は奈留島での商用での生産はなく、五島市全体での出荷率も限定されている）¹²。とくに、大豆や小豆は、各集落で作られる豆腐や餅の核をなす原材料でもある。

また、平地や斜面を開墾することで作付けされる、甘藷や麦、そして、トウモロコシ以外にも、奈留島の住民は山の中から野草であるヨモギを採取し、粉末にした米と小豆を用いたヨモギ餅を作り、集落の行事の参加者や来訪者にふるまったりする。また、陸上の道路網が整備されるようになった1960年代から1970年代（昭和40年代）以前は、島内の移動は船を使った海上での移動か、舗装されていない山道を徒歩で移動した。道路整備が施される以前に島内の学校で義務教育を受けていた世代の住民は、集落から学校までを山道をたどって徒歩で通学した。特に、汐池地区や矢神地区など、学校から離れた集落に住む子供たちは季節によっては日の出より前に家を出て学校に向かう必要があった¹³。そのような、労力を伴う通学の際、疲労を軽減するものが山に生える野イチゴであった（このことは、舗装されていない山道を歩いて通学する必要があった近隣の久賀島の五輪地区や若松島の間伏郷の住民からも同様の体験談があり、諸事情により通学中に大幅な遅刻が見込まれた際には、学校に向かうことを止め、帰宅時間になるまで「山学校」と称し山道の中で時間を過ごしたものもいた）¹⁴。

このように、奈留島においては、その空間的規模は島内の集落ごとに異なるものの、平地と斜面に開墾された田畑とその背後にある野草を有する山という食と生活にまつわる2つの景観的要素が視覚的に広がっているのである。そして、家屋や集会所といった居住・社会空間において、住民は集落内の農業・自然景観から採取された食材を海や島外から入手した食材と織り交ぜ、加工、活用、消費するのである。

(2) 漁業から見る集落景観

¹⁰ 筆者による聞き取り（奈留全域：2018年8月）。

¹¹ 例として矢神地区では、戦中・戦後に甘藷の栽培量の増加がみられたが、米は配給が中心だった（筆者による聞き取り：2018年8月28日）。

¹² 農林水産省 2016年『2015年農林業センサス』

¹³ 筆者による聞き取り（矢神：同上、汐池：同上、奈留：2018年8月30日など）。

¹⁴ 同上。

海に囲まれた五島列島地域では、集落によっては漁業は景観形成の重要な要素となっている。奈留島では、それぞれの地域において多様な漁業手法が運用され、集落住民の経済的基盤となっていた。沿岸に設置されたいかだでは長年ブリの養殖がおこなわれていたが、2000年代末より葛島の南側で相浦湾の北部の沿岸部においてマグロの養殖がおこなわれており、養殖場に隣接する夏井地区が拠点となっている。沿岸漁業ではカツオやイカ、イワシ、マグロ、そして、キビナゴなどが水揚げされてきたとともに¹⁵、沖合で漁をおこなう巻き網漁船は済州島近海から南西諸島付近までの幅広い海域で活動しており、カツオやタイなどを水揚げしていた¹⁶。ちなみに、2018年の調査時においては、宿輪地区の巻き網漁船団が奈留島から約2時間程度西側の漁場で漁に従事し、海産物を島外に出荷している。このように五島列島地域付近から東シナ海という沿岸から沖合にかけての幅広い海域で漁に従事してきたのが奈留島の漁師であった¹⁷。

そのため、船外機付の小型船から巻き網漁船団まで、奈留島内の各集落における港には、各集落の住民が従事する漁の目的に応じた様々な種類の船や漁具を目にすることができる。陸地には魚の水揚げに必要な保存・加工設備や船舶の支援設備などが立てられるとともに、船も陸上設備も時代とともに常に変化してきた。

このことは、漁業が島の主要産業の中核である奈留島においては、特に顕著であるといっている。例えば、イリコ（煮干し）の原料となるキビナゴは奈留島の各集落の沿岸で水揚げされ、1960年代までは島内に多くあった窯で加工され、島外に出荷されていた¹⁸。男性が主に漁に従事していたのに対して、イリコの加工場においては女性を中心とした作業体制が取られており、そこでは奈留島外から働きにきた従業員も多かった。島外出身者と連携、もしくは、共同で作業するという労働環境は、奈留島内における島外出身者との交流を持つ場となり、時には、婚姻につながることもあった¹⁹。ちなみに、1960年代以降、一般家庭に冷蔵庫が普及し始め生食や生鮮食品の冷凍保存が身近になったこととともに、海産物の市場への出荷方法は全国的に変容したとともに、奈留島をはじめとした加工場も減少していった。

ここで重要なことは、各集落の港の景観的要素としての特性である。島の機能的な中心部である奈留湾付近においては、五島列島の海洋交易に奈留島の重要性と変容がその景観に凝縮されている。湾内には、小型船からイカ釣り漁船、巻き網漁船、そして、定期船などが係留されている。このことは、奈留島の漁業および海洋交通手段が多様であることを視覚的に表象しているのである。また、それだけでなく、新旧多様な引揚船台は、長い間、奈留島が技術的な面でも五島列島の海洋交通のハブのひとつであり続けてきたことを示している。同様のことは、島内の集落のそれぞれの港においても見られ、東風泊地区の港には現在も木造の筏が係留されて

¹⁵ 『五島民俗図誌』 p. 54。

¹⁶ 筆者による聞き取り（宿輪：同上、若松：同上）。

¹⁷ 筆者による聞き取り（宿輪：同上）。

¹⁸ イリコを煮るための窯は奈留だけではなく、福江島にある奥浦地区の檜ノ木集落や若松島など隣接する島の漁村も多く有していた。

¹⁹ 筆者による聞き取り（椿原：同上）。

いたり、椿原地区においては潮位の変化に対応した船の係留をするための縄が磯浜から水中に向かうように設置されている²⁰。島内にある港の多くが 1970 年代以降に補修・近代化の工事を受けてはいるものの、その多くにおいて補修工事以前の特性を継続的に受け継いでおり、歴史と近代技術が混ざり合う独特な港湾の景観を形成しているのである。

(3) 食や儀礼と結びついた集落景観

島内における祭礼の際や日常生活で消費される海産物は、農作物と同様に商用として出荷する値段の付く物と、余剰物や安価なものなどが差別化された。後者は主に奈留島内の住民の消費となり、前者は商用として島外へ流通していっただけでなく、島内においてもご馳走として振舞われたり、祭礼のときの供え物としても用いられてきた。そして、それら奈留島内や海域でとれた食材は、交易によって島外から入手した食材とともに供え物やご馳走として、同じ祭壇や食卓に並べられるのである。つまり、供え物やご馳走を分析することにより、奈留島の集落景観を海洋交易を含めた社会的環境と結びつけながら把握することを可能になるのである。

矢神や檜木山といったカクレキリシタン系の集落の、お大夜（カトリックの 降誕節、つまり、クリスマス）や悲しみ上がり（カトリックの復活祭、つまり、イースター）といった祭礼の際に準備される供え物とご馳走を例にとることができる。住民は、お供え物として、お神酒、生臭（刺身など）、オメシ（ご飯）、焼き魚・煮魚などを用い、特に、檜木山の場合、生臭として使う魚はハガツオを使い、カツオは季節に応じて保存のために燻製にしたものを利用した²¹。祭礼後の会食では、豆腐や煮しめ、かまぼこ、として、天婦羅（魚のすり身揚げ）なども振舞った。また、カクレキリシタンと神道の両方の一部集落では、お正月には、シャギドンといわれる供え物を準備した。シャギドンはお神酒、米、塩、魚、野菜（大根など）、そして水から構成された。

カトリックの集落においては、クリスマスや復活祭には特別に集落で育てたヤギや鶏を絞めご馳走としてふるまったり、島内の他の集落の祭礼食やご馳走と同じように刺身やふくれ餅、そして、煮付けなどを準備したり、叉焼などの肉類も提供された。

ここで注目すべき点は、祭礼などにおける供え物やご馳走として提供される食べ物は、各集落において農地や漁場から得られるものや、お米や大豆など島外から持ち込まれるものの両方が用いられている。しかし、刺身としてのハマチやマグロ、ヒラス、ヒラマサ、ブリといった魚介類は市場価値が高く、カンコロは甘藷の中でも良質のものであり、御神酒やお飯の材料である米は主に島外から持ち込まれ、そして、ヤギや鶏といった肉類は日常においては入手しづ

²⁰ ちなみにこの縄は、2018年7月3日に五島列島を暴風域に巻き込みながら通過した台風7号の影響で破損を受けた。そのため、集落住民が後日泳ぎながら補修する必要が生じた（2018年7月27日の調査者による観察）。

²¹ 筆者による聞き取り（檜木山：同上）。カクレキリシタンのお供え物においては、奈留島と福江島といった下五島のカクレ集落においてヒレのある魚が用いられたが、イワシは供え物としてはならなかった。また、集落によってはお正月にも供え物やご馳走を準備した。

らい食材である。つまり、供え物やご馳走は島内の集落景観と交易を凝縮したものではあるものの、同時に住民生活からは特別な非日常的なものでもある。そのため、より日常的に消費されたのが、アジやイワシ、味噌やトウモロコシ、そして、焼酎などの比較的低価格な食材であった。高価なもの、そして、低価格なもの、いずれのものも奈留島内の集落景観の重要な要素であった。

3. 集落間の社会的な結びつき

奈留島内の各集落の住民は必要な食料や物資、または、人材などを近隣の集落と必要に応じて取引・共有することにより集落間の結びつきを形成してきた。例えば、久賀島と奈留島の集落の間では通婚関係がみられるだけでなく、相互扶助や経済活動、そして、宗教活動といった幅広い分野で、海を越えた集落間の交流が活発であった。

(1) 交通網による集落間の結びつき

大串地区を含めた奈留島の北西部の集落は、久賀島の東部の集落と約3kmほどの海峡である奈留瀬戸を挟んで面している。大串、江上、小田のそれぞれの地区から対岸に位置する久賀島の蕨、福見、五輪といった集落を明確に望むことが可能である。2018年現在、この奈留瀬戸を挟んだ奈留島と久賀島東部を結ぶ定期船は無く、移動には個人が船を出すか、もしくは、海上タクシーをチャーターするかのいずれかに限られている。つまり、五島列島における現行の定期海洋航路においては、奈留-久賀の両岸は結びついていない。しかし、1970年代末ぐらいまではこの両岸はフェリーでつながっていた記録が残っている。

1973年(昭和48年)に発行された『郷土奈留』(奈留町教育委員会 1973)によると、西海商船が大きさにして48トン級の鯛福丸を「大串-蕨-奈留」という航路で1日1往復運航していた。運行時間は、大串と蕨の間で約20分間かかり、最終目的地である奈留港までは大串から約1時間かかることが見込まれていた。このことは、大串地区の住民および久賀島の蕨地区の住民に対する聞き取り調査の際にも確認できたことであり、複数の調査協力者が「奈留瀬戸を橋渡ししていた定期便が昭和50年代ごろまで運行されていた」という記憶を有していた。

奈留島の北西に位置する大串地区と島の中心部に位置する奈留港の間を奈留瀬戸を航路にした交通網が存在した理由については、起伏が激しい奈留島の地理的特性に起因していたと分析できる。現在のような舗装された道路交通網が普及する以前においては、島民は近隣の集落に陸上で移動する際には、舗装されていなかった山道を歩いて峠を越える必要があった。例えば、山を挟んで隣接する江上地区と小田地区、そして、宿輪地区の3地区の移動に使われた山道や、江上地区と夏井地区を結ぶ遠命寺トンネルが開通する以前に使われていた山道も、2018年の時点で観察・歩くことが可能である。しかし、奈留島で使われていた山道は、通学などのための徒歩移動が基本であり、物資移動への活用は適していなかった。そのため、大人数での移動や多量の物資の運搬に関しては海洋交通が基本だった。例えば、宿輪地区においては、道路整備に伴う通学バスが開通する以前は、スクールボートを通学の交通手段として運営してい

たことがあった。徒歩と比較し、搭載量が相対的に大きい海洋交通の活用は、集落生活の利便性の側面からは非常に合理的であり、このことは起伏が激しい奈留島の地理的特性にとって理想的であったといえる。

(2) 潮位を活用した海洋移動と集落の社会経済的な結びつき

奈留島を含め五島列島で船舶を所有している、もしくは、所有していた住民に調査協力を依頼すると、返答の特色として潮位の変化を無意識のレベルで把握し、合理的な海路を把握していることがわかる。潮位は月と太陽の地球からの位置と引力の関係で、約1日に2回づつ干潮と満潮を繰り返す。奈留島を含めた五島列島においては上げ潮時が北流になり、下げ潮時には南流になるため²²、島民はこの潮位の変化の時間を把握することで、潮流の向きや速さの変化を予測するとともに、暗いときは星や島影を把握することで、久賀島や若松島を含めた他の集落への海路予測や訪問計画を立てていた²³。そのことにより、人力であった伝馬船でも瀬戸を渡り、他の島に行くことが可能であった。造船技術が発達し船外機を搭載するようになって、燃費の向上や航海の安全のために潮位を把握することは、現在でも行われている²⁴。例えば、本調査者が聞き取りを行った際、奈留島と久賀島のそれぞれの集落に住む船舶所有者に共通する語り方として「潮目を見て、五輪に行って、そのあと、潮の流れが変わる時間を待って、時間がたったら宿輪に戻った」というような表現を複数の住民から聞き取れた。これは、海を基軸とした時間感覚と空間感覚を示したものであり、海が住民の中で地理的感覚や集落関係の基本になっていることを示している。

海に関する知識を活用の例は、久賀島東部と奈留島西部の集落の結びつきである。具体的に漁業に関しては、久賀島の漁師が養殖のための餌を宿輪地区の漁業関係者のもとに定期的買いにきたり、久賀島の五輪地区の住民が生活物資の調達のために奈留港に船で出向くこともあり、これは、平成期にも行われていた²⁵。そのため、蕨地区や五輪地区といった久賀島の東岸の集落に住む島民の中には、直接の海洋交易が減少した現在でも奈留島に対して親近感を持っているものも多い。

また、1980年代（昭和60年代）ぐらいまでは、運動会や社交会などは奈留と久賀の集落が合同で開催しており、例えば、江上小学校の校庭においては学校の行事からバレーボール大会、そして、漁協のソフトボール大会まで、文字通り大人から子供まで、海を挟んだ地域交流が持たれていた。久賀島の蕨地区から参加する場合は、蕨港から出港した、後大串港で船を降り、

²² 津田宗男他（2015）「五島海域における潮流特性と潮流発電エネルギー賦存量」『土木学会論文集中B3（海洋開発）』71(2), p.1121

²³ 筆者による聞き取り（若松：同上、矢神：同上、久賀：同上など）。

²⁴ 久賀島の蕨地区の住民によると、約9馬力の船外機が付いた船であると、蕨地区から奈留港まで20分かかるとのことであった（筆者による聞き取り：同上）。

²⁵ この五輪地区の住民は、現在は生活物資の調達は福江で行っている（筆者による聞き取り：同上）。

江上地区まで陸上を移動した²⁶。このような集落間の交流に関する話は奈留島においても聞くことができ、宿輪地区の住民によると、ソフトボール大会といったような球技大会にくわえ、宴会を通じた集落間の社交の機会も持たれていた²⁷。

このような集落間の結びつきは、経済活動や社交のみならず、時には危機的状況における相互扶助の基盤ともなっていた。久賀島の蕨地区においては複数回規模の大きい火災が記録されているが、特に昭和47年の大火を例にしてみると、その炎が対岸に位置する大串地区からも観察され、そのことから大串地区から急遽船に乗り、消火活動のために久賀島で救援活動に参加したということがあった²⁸。この蕨地区の大火の際における大串地区からの救援については、救援に駆け付けた大串地区の住民だけでなく、救援を受けた蕨地区の住民の間でも記憶として語られている。

(3) 海峡を越えた習俗的な結びつき

(3-1) 神道

奈留島内の集落と隣接する島の集落と結びつきは、宗教的に顕著である。例としては奈留島と久賀島北東部の蕨地区との神道を通じた結びつきや、奈留島の江上・小田・宿輪地区と久賀島の五輪地区のキリスト教（主にカトリック）の結びつきがあげられる。

奈留島の神道は久賀島との関係を抜きにして議論することが難しいだけでなく、機能的に重要な役割をはたしている。奈留島の奈留神社の宮司は蕨地区の神社である蕨神社の宮司を兼任してきているだけでなく、奈留島に点在する神社のしめ縄の藁は、2010年まで久賀島の蕨地区の水田よりまかなわれていた。

現在、久賀島内に常住している宮司はいなく、福江島と奈留島に居住している宮司が久賀島内の各地区の神社の宮司を兼任している²⁹。特に、蕨地区にある蕨神社においては、1968年（昭和43年）に登録上奈留島の奈留神社の宮司に移管されて以来、現在まで蕨神社と金比羅神社の宮司を兼任している。そのため、祭礼をはじめとして奈留神社の宮司は奈留島より島民の漁船等を利用して蕨地区での職務についていた。久賀島には奈留島から宮司が移動してくるのに対し、数年前まで蕨地区からは奈留島へ稲わらが奈留島内の神社のしめ縄の材料として供給されていた。蕨地区の水田で取れた稲わらは蕨港よりチャーターした船に積まれ、奈留島まで運ばれた後、奈留神社の氏子の手作業でしめ縄とされたあと、奈留島内の各神社に供給された。奈留島では、船廻地区に以前あった水田以外、現在では島内において生業として稲作に従事している島民は非常に限られている。そのため、奈留島にとって久賀島蕨地区は稲わらの重要な供給地であった。しかし、奈留神社にとって蕨地区より稲わらを提供してもらうことは、近年

²⁶ 筆者による聞き取り（久賀：同上）。

²⁷ 筆者による聞き取り（久賀：同上）。

²⁸ 筆者による聞き取り（久賀：同上、奈留：同上）。

²⁹ 各地区の宮司の兼任状態は、蕨地区が奈留神社（奈留島）、久賀地区が七岳神社（福江島）、田ノ浦地区が住吉神社（福江島）、そして、猪ノ木地区が住吉神社（福江島）となっている。

において神社を運営していくための費用対効果側面難くなっており、2015年には五島外部の業者より化学繊維のしめ縄を購入し運用している。

(3-2) キリスト教 (カトリック)

奈留島の神道集落と同様、奈留島の西岸に位置するカトリック集落である江上地区も久賀島のカトリック集落の一つである五輪地区との結びつきが強かった。江上地区にはカトリック長崎大司教区の巡回教会である江上天主堂があり、1918年3月の教会の献堂よりの信徒は主に江上地区、および、南の小田地区と宿輪地区から構成されていた³⁰。つまり、江上天主堂は、奈留島の中心に位置する奈留教会やかつてあった葛島教会とともに、奈留島のカトリック信徒にとって重要な役割を果たしてきた。その中でも江上天主堂は奈留島の西岸に位置しているという立地条件から、奈留島のみならず、海峡を挟んだ久賀島から、特に五輪地区からもクリスマスのみサ等への参加があったなど強い関係性を持っていた³¹。

これまで論じてきたように奈留島と久賀島東岸の集落は、海洋交易で強いつながりを持っていたものの、現在の教会の行政的な管理区画は、五輪地区は福江島の福江教会であるのに対し、江上天主堂は奈留教会の管轄下となっている。つまり、海洋交易の往来が多かった奈留瀬戸の真ん中に教会の管理区域線が引かれており、興味深いことにこのことが奈留瀬戸での海上の往来が減少した中でも、最近まで地元のカトリック信徒が海上の往来をつづけた一つの理由になった。

江上天主堂も五輪教会も、常駐する神父がいない巡回教会である。神父が常駐している奈留教会や福江教会では毎週末に主日みさが執り行われているのに対し、巡回教会である江上天主堂と五輪教会で主日みさが執り行われるのはそれぞれに月1回である。道路が整備された現在においては、五輪地区の信徒は同じ久賀島南部にある浜脇教会での主日みさに参加しやすくなったものの、海上で移動する場合は、浜脇地区も江上地区も距離的にはあまり変わらない。そのため、潮流の変化の知識を生かしながら、五輪地区の信徒は江上天主堂での主日みさに参加することもあった。また、五輪地区のカトリック信徒によると、クリスマスや主日みさだけでなく、奈留島を含めた久賀島近隣にあるカトリック教会には、それぞれの教会の守護聖人の日の礼拝には船を出して参加していた³²。本調査協力者によると、この海洋交通を通じた教会訪問は、あくまで信徒個人個人の個人的な取組みであり、教会単位での組織だった行事ではないと説明を加えていたが、それはつまり、実際には住民のレベルで、それだけ奈留瀬戸における海上での往来が身近であり、現実的に経済活動から宗教信仰にいたるまで生活に関わる幅広い局面に、奈留瀬戸が両岸に位置する集落住民の日常の基礎になっていたことを示しているとい

³⁰ 宿輪地区はかつては元帳の地域といわれるが、禁教令の撤廃以降は、カトリック教会に合流した世帯と元帳の信仰・伝統を継続しのちに神道に改宗した世帯が集落の中に併存し現在に至っている。

³¹ 『五島市久賀島の文化的景観保存調査報告書』（2011）を参照。

³² 筆者による聞き取り（久賀：同上）。

える。

3. おわりに

奈留島はその起伏の激しさから、集落特性が久賀島とは異なるような印象を与えることもあるが、島内の各集落の社会的特性に着目してみると、その多くが海岸から山頂に向けた溪谷に集落が形成されていること、そして、その溪谷には小川や湧水という水源があることなど、久賀島の集落特性と共通しているだけでなく、海を挟んで近隣の島にある集落と機能的につながっていることが多い。

島内での道路整備や定期船の廃止といった海洋交通網の変化、さらに、過疎・高齢化の進行により、2000年代以降、隣接する島にある集落との交易は減少してきている。また、過疎・高齢化に加え、漁獲の変化や市場における魚の卸価格の下落なども影響し、海路は徐々に変化して来ており、それに伴い、奈留瀬戸を挟んだ社交行事が開催されなくなるなど、集落機能の結びつきも変化してきている。奈留島がかつて有していた地域の中核地として機能と海運の中継地としての役割の機能にも低下がみられ、そのことから久賀島の蕨地区のような歴史的に奈留島と関係の深い集落との結びつきも弱くなってきている。

奈留島の集落景観は、集落住民の生活と知識の活用の変化を表象する動的な景観であるといえる。海という地の利を生かすとともに、海に関する卓越した知識を基礎に漁業に従事するだけでなく近隣の集落との往来や交流を活発に行う。これが奈留島の集落の社会的な特性であるといえる。現在の海洋交易の沈静化が一時的なものになるのか、もしくは、沈静したままになってしまうのか。つまり、過疎・高齢化のなかで住民が有する海洋の知識をどのように保存し伝承していくかということが、奈留島の集落だけでなく、近隣の島の景観保全の今後の変化の鍵となるといえる。

第2節 交通

(1) 奈留島と隣接する島々の集落との結びつき

奈留島は、長崎本土より遠く離れた五島列島のほぼ中央に位置し、四方を海に囲まれている。また入江が多く、複雑で長い海岸線を有しており、急斜面をなす山が海に迫っている。そのため平地が少なく、車社会になる以前の道路状況は、坂道が多く道幅の狭い里道があるだけであった。このため、陸上の交通は極めて不便なものであった。

海上交通においては、明治末期に至り、奈留島と隣接する島々を結ぶ定期航路が開通している。島内の他地区への往来は、徒歩での山越えか海岸沿い、若しくは船を利用していた。

その後、住民生活にとって欠くことのできない重要な社会基盤施設として、道路整備の必要性が問われ、昭和40年代初頭における一般乗合バスの運行を契機に、道路の新設・改良が急ピッチで進められていった。特に、海岸は護岸道路を兼ねるようにして整備が進められ、かつての風物詩であった海岸域でのガケダナの風景も急激に姿を消していくことになってしまった。

海を介した隣接する島々の結びつきを記した地図『伊能図大全・第5巻 伊能中図・伊能小図』（図5-1）10）には、大串や夏井といった現存する集落の名前とともに港を示す船印が示されている。これら船印より当時の夏井集落、泊集落周辺の港が海上交通の要所として利用されていたことが伺える。集落住民の生活空間は集落が立地している陸地のみ



図5-1 伊能図大全第5巻伊能中図・伊能小図

で完結せず、海を挟んで隣接する島々の集落を含めた広域であったことが看取される。例として奈留島西部の集落は、久賀島北東部の集落（蕨、福見、五輪）と海を挟んで結びついており、以下の節では、この結びつきについて詳述する。

①大串集落と蕨集落

奈留島の集落の慣習は、久賀島との関係を抜きにして議論することが難しいだけでなく、久賀島における慣習の運営においても機能的に重要な役割を果たしていた。奈留島に点在する神社のしめ縄に使用された稲わらは、最近まで蕨集落の水田より賄われていた。

奈留島では昭和の終わり頃までは、船廻集落に僅かに水田が残っていたものの、現在では島内において生業として稲作に従事している島民はいない。そのため奈留島にとって蕨集落は、

稲わらの重要な供給地であったといえる。また蕨集落の水田でとれた稲わらは、蕨港より船に積み、大串湾より奈留島に運ばれてから奈留神社の氏子の手作業でしめ縄にされた後、奈留島の各神社に供給されていた(図5-2) 11)。また奈留町郷土史には、キビナゴの素干、煮干製品、花実(しきみ)を長崎の間屋や中国人に売するため、大串集落の住民が久賀島の蕨集落へ舟で往来し、多い時は月に3回程往来したと記載されている 12)。このように大串集落は生業における物流の要であったと言ってよいだろう。

また宗教上のつながりでは奈留神社の宮司が久賀島の蕨神社の宮司を兼任しており、ここでも大串地区が交通の要となっていた。久賀島内の4地区(蕨、久賀、

田ノ浦、猪ノ木)にある神社の宮司が昭和43年に宮司職を離職して以来、久賀島に常在している宮司はおらず、奈留神社の宮司が大串集落より海上タクシーを利用して久賀島へ渡り蕨神社の宮司を務めていた 11)。しかし、島民個人での島間の往来が少なくなったことに伴い、宮司の兼任や稲わらを通じた兩岸の集落関係は、現在中断されている。

また、以前は蕨集落の住民が奈留港経由の長崎行きフェリーに乗船するため、船をチャーターして奈留港に移動する姿も見られたが、現在は定期船の運賃が下がったことにより(島民割引)、福江港へ向かう長崎行きフェリー、高速船に乗り換える行程が主流である。



図5-2 奈留島と久賀島の神社の関係

②江上地区と五輪集落

蕨集落と同様、久賀島東部に位置する五輪集落も以前は奈留島との結びつきが強かった。江上集落と五輪集落の結びつきはカトリックという宗教を介した結びつきと、漁業・農業という生業を介した結びつきの二重の繋がりがあった。

昭和30年代頃まで五輪地区では、イワシ漁が活況であったとともにイワシの缶詰工場が建設・稼働していた¹³⁾。当時の五輪地区の世帯数は約40世帯弱であり、イワシ漁に加えて農業も営まれていた。農業で栽培した作物は集落内での消費のみならず、特にサツマイモ栽培は焼酎の原料として島外でも販売がなされていた。また五輪集落の住民だけでは農作業に必要な人手が不十分であったことから、協力要員として遠洋漁業の漁師が

潮の干満にあわせて隣接する奈留島から五輪集落に来ていたことも把握されている。加えて江上天主堂において礼拝が行われた際には、五輪集落の住民を含めた久賀島北東部に住むカトリック信者が伝馬船で江上天主堂の礼拝に参加していたことも明らかとなっている(図5-3)。



図5-3 江上集落と五輪集落の関係

(2) 島内の集落の結びつき

かつて奈留島の島民は盆と正月の買い物のために片道10時間~12時間かけて艀漕ぎ舟で福江島まで渡っていたとの記録がある¹³⁾。また大串・江上集落の島民はキビナゴ漁が盛んであった頃、共同でキビナゴを加工し久賀島へ船で運んでいた。その後、島内外の交通網の整備・発達はなく、明治末期に至り、島外と結ぶ定期航路が開けた。一方、島内の集落間も舟での往来が盛んで、大串-浦間や大串-戸浅(田尻海岸)間での渡し舟などが存在していた¹²⁾。郷土誌によると、大串古老の話として、大串や夏井から奈留にある学校へ通う子供達が朝と晩、大串-戸浅間の渡し舟を利用していたという。当時峠を越えて通うことも出来たが、大串から小田河原まで舗装されていない林道を通り現在の奈留高校まで行き、そこから奈留に下らなければならなかった。



図5-4 集落機能の結びつき

利用していたという。当時峠を越えて通うことも出来たが、大串から小田河原まで舗装されていない林道を通り現在の奈留高校まで行き、そこから奈留に下らなければならなかった。

また大串湾で大漁が続いていた大正 6 年は、大串と江上は共同でキビナゴ漁を行っていたが、当時の大串と江上の往来は山道を利用する陸上交通と個人の船を利用する海上交通の二つがあった(図 5-4)。このことから各集落の機能は、航海技術を基礎とした海上航路によりつながっていることが伺える。よって海は生活範囲の限界ではなく、むしろ奈留島では住民の生活圏を形成する貴重な地理的要素として捉えることができるだろう。

(3) 交通網の変容

江上集落は大串湾に面しており、江上天主堂を訪れるために島外の信徒はもちろん、島内においても船を利用する信徒も存在した。元々の船着場は現在の江神漁港辺りにあり、昭和 27 年に漁港の指定を受けたのち、昭和 37 年に現在の漁港への整備が開始されている。

一方、前述したように大串漁港も交通の要所として利用されており、徐々に整備が進められていった。大串漁港には防波堤が設置されたが、設置以降不漁が続き、防波堤の設置が大串湾での漁業衰退の原因とも言われている。昭和初期には、福江島、奈留島、長崎を結ぶ 2 航路が交互に運行されるなど、航路の合理化が図られた。昭和 24 年には、福江島、奈留島、上五島、長崎を結ぶ航路が、昭和 33 年には長崎と福江島を直接結ぶ航路に改訂されている¹³⁾。昭和 46 年、1 千~2 千トン級の大型フェリーが次々と就航され、福江島、奈留島、上五島、博多を結ぶ航路が整備された。現在では、フェリー、高速艇、海上タクシーが下五島の島々を結んでいる。また島内の道路の整備は、島民の主な移動手段が海上交通から陸上交通へ移行したことにより拍車がかかったといえる。

(4) 社会環境及び交通から見た奈留島

奈留島はその起伏の激しさから、集落特性が久賀島とは異なるような印象を与えることもあるが、島内の西部の集落の社会的特性に着目してみると、海岸から山頂に向けた溪谷に集落が形成されていること、そして、その溪谷には小川や湧水という水源があることなど、久賀島の集落特性と共通することが多い。それだけでなく、奈留島西岸の大串、江上、小田、そして、宿輪といった集落は、経済活動、社会活動、そして、習俗といった日常生活に関わる幅広い側面で、奈留島の西南に位置する久賀島の集落と密接につながっているのである。

しかし、島内での道路整備や定期船の廃止といった海上交通網の変化、さらに、過疎・高齢化の進行により、平成 20 年代以降、奈留瀬戸を挟んだ海上交流は下火になってきている。また、過疎・高齢化に加え、漁獲の変化や市場における魚の卸価格の下落なども影響し、海路は徐々に変化して来ており、それに伴い、奈留瀬戸を挟んだ社交行事が開催されなくなるなど、集落機能の結びつきも変化してきている。奈留島がかつて有していた地域の中核地として機能と海運の中継地としての役割の機能にも低下がみられ、そのことからも蕨地区のような歴史的に奈留島と関係の深い久賀島の集落との結びつきも弱くなってきている。

そのため、奈留島西岸の集落の景観は、久賀島の景観と同様、集落住民の生活と知識の活用の変化を表象している景観であるといえる。海という地の利を生かすとともに、海に関する卓

越した知識を基礎に漁業だけでなく近隣の集落との往来や交流を活発に行う。これが奈留島西岸の集落の社会的な特性であるといえる。現在の海上交流の沈静化が一時的なものになるのか、もしくは、沈静したままになってしまうのか。つまり、過疎・高齢化のなかで住民が有する海洋の知識をどのように保存し伝承していくかということが、奈留島西岸の集落だけでなく、久賀島を含めた近隣の島の景観保全の今後の変化の鍵となるといえる。

- 10) 河出書房新社：渡辺一郎(監修)、伊能図大全第5巻伊能中図・伊能小図、p. 242、平成25年12月10日発行
- 11) 五島市：五島市久賀島の文化的景観保存計画、五島市文化推進室、p. 63、平成23年3月
- 12) 奈留町郷土誌編纂委員会：奈留町郷土誌、p. 254、平成16年7月31日発行
- 13) 長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・集落調査報告書 下五島地域、p. III-141、平成20年
- 14) 長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・集落調査報告書 下五島地域、p. III-147、平成20年
- 15) 長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・集落調査報告書 下五島地域、p. III-156、平成20年
- 16) 長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・集落調査報告書 下五島地域、p. III-165、平成20年